

# 紹介

## ●百濟史研究

故今西 龍著

故今西博士遺稿第二の百濟史研究一冊、今回付板工を竣へて世に出づ。故今西博士が不世出の朝鮮史家であられた事は今更歎々を要せず、周知の事であると共に、本書を手にして今更にその感を切にするのである。今や博士逝いて滿二年三回忌の日を以て、本書が成つた事は一入故博士に對しての追憶を新にするのみならず、滿鮮史研究、再認識のやかましき折柄、誠に學界の爲慶賀に堪へぬ所である。

拙本書は、故今西博士の無数の研究の中比較的最後の研究と言つてよい百濟史關係の研究論文を一括されたものである。今其目次を挙げるに、巻頭には故博士の最後の背影を掲げ、次に故博士の師事して其研究を一層深くされた所の内藤湖南博士の序文あり、本論は百濟略史、百濟史講話、百濟國郡漢山考、百濟五方五部考、周留城考、白江考、百濟舊部扶餘及び其地方の七篇に分れ、附録として「全羅北道西部地方旅行雜記」を載せ、巻末に編者の後記を録してある。本文四一四頁、附録一八〇頁の金玉珠文の集録大著と言ふを懼からぬ。巻頭の背影は昭和七年四月令息春秋君の撮影にかゝるもので、京城のお宅でかの有名な新羅眞興王巡狩碑の拓を背にして、和服のまゝ、寛いで居ら

れる所の温容である。七年四月といへば故博士が久し振りに京大講義の爲に京都に赴かる、直前の時であり、然も宿痾再發の結果永眠された時より僅か月餘の前であつて、故博士の背影として、最後のものであり、我々門下生として限りなき追慕の念を新にする所の記念像に外ならない。湖南博士の序文は故博士の研究學風の大要を述べて、我學界に於ける赫々たる業績の一端を顯はすと共に、今後後に於ける後進の奮發してその遺業を能く繼承發展せん事を切望されたもので、一讀よく故博士の學的奈貌を伺ひ得ると思ふ。

本論第一の百濟略史は未定稿ではあるが、昭和五年五月大田の朝鮮教育會に於ける講演原稿に訂正加筆されたものであり、その附録となつて居る「厩作金庾信平濟頌神文と扶餘」は「朝鮮及滿洲」の昭和四年六月號に掲載されたもので、生前右の附録とする事に豫定されたものと聞いて居る。略史と言ふ以上、開國傳説より始つて百濟の滅亡後迄の事に於て、全般に互り、七章に分けて極めて簡単に述べてあるが、其簡にして要を得た記述は流石に故博士の如き大家ならでは企て及ばぬ事で、全く故博士の獨占場と言ふを懼からぬ。殊にこの論文の緒言に於て、日本上代史の一部として百濟史を扱ふ時の史家として、又日本人としての矜持と感慨とを力強く高調して居られる所は、平常我が皇室中心思想を有ち、熱心な日本主義者であつた故博士の思想の一斑を知るに足ると共に、日本史家必讀の金言と言ふべく、又讀者に必讀されん事を勧めたいのである。第二の百濟史

講話は右の百濟略史を詳述されたもので、昭和五年七月より七年五月迄の間に於て、「文教の朝鮮」に八回に亘つて掲載されたものである。これは、故博士も自ら「この種の著述が少いらしいから、詳述した方が讀者の參考にも或はなるかと考へて紙數に制限なしに書き続ける事にした」と言つて居られる如く、長く續けて詳しい歴史を書かれる考へのものであつた。故に京大講義の爲七年四月京城を出發さるゝ迄筆を採り、大成を期せられたものであるが、不幸にして中途道山に歸せられた爲、其完成をみなかつた事は我々の深く遺憾とする所であるが、草稿中より二章を補つて大體百濟の滅亡直前迄を述べてあるのは、大な喜びとする所で感謝にたへぬ次第である。尙其序文に於て恩師坪井九馬三博士に感謝の意を表して居られるのは、弟子として美ばしい謙讓の美德を示されたもので、そゞろ敬慕の念にたへぬ所である。次の百濟國都漢山考は史學雜誌二十三編一號に載せられた論文で、近肖古王が高句麗に勝つて箕都した漢山城が今日の廣州か京城か何れなるかを論ぜられたもので、此事は容易に定め難いが、種々の點よりして南漢即ち今日の廣州の地なるべしと斷ぜられたものである。數十年都した所とは云へ、何分高句麗、新羅と共に争奪の地點となつた所で、百濟の方にも完全な記録がなくなつた爲に史料残らず、容易に定め難いのを、苦心して研究されたのであつて、百濟關係の研究として古いものゝ一である。次の百濟五方五部考は大正十年藝文十二年八號十一號に載せられたもので、百濟は高句麗と同じく扶餘種

の國であるが、國狀に於て實に於て兩者間に異なるもの少くなく其中百濟の後期に國を五部五方に分ち、又貴族を五部に分けたが、これも其形に於ては高句麗に類似して居るが、實質に於ては異なるものあり」と前提して五部五方、方領及五方城の位置、百濟人の氏姓官位氏名の上に冠する部名、五方五部制定の年代百濟末年の五部、百濟末に於ける氏名の上に冠する部名、三國史記に見ゆる部名、及び結論の九項に分けて聖明王の時設置された五部五方に就いて詳密な研究をされたものである。これによつて半島に於ける國家組織の一面が明らかにされるのは言ふ迄もなく、部名を持つ貴族が如何なる地位に在つたか、國勢との消長關係如何等は誠に興味ある問題と言つてよい。次の周留城考及び白江考の二者は共に未定稿である。周留城は三國史記新羅紀文武王十一年秋七月、文武王答大唐總管薛仁貴書に見えるもので、これは太宗紀に見える豆良尹城と同じであるとの前提の下に、其位置を考證して、金堤の南又は西南にて古阜城の東南斗升山がその城址なりと斷ぜられて居る。但し本書の百濟略史には、周留城に注して、「豆良伊とも書く、扶安郡の遇金岩山城である」と記されて居るがその略史の作製年次の後なりと思はれる所からして恐らく故博士は研究の結果後説に改められたのでなからうかと思はれる。又、白江は峯巒と共に百濟末の歴史地理考究上に重要な地點であるが、從來其研究が不十分であつた爲、新に之を定めんとせられたものであつて、初めに史料を掲げ、白村江を論じ、伎伐浦に及び、白江の傳説地を述べ

最後に結論として、「三國史記及び三國遺事の百濟都城陥落の際の記事に見ゆる白江は、今の錦江の一部分的稱呼たる白馬江にして、伎伐浦の別稱に非ず」と述べて居られる。尙この白江及び炭峴に關して池内博士は今年四月の東洋學報(卷第三十一號)に説を載せて居られるから、併せ見られん事を希望して止まない。本論最後の百濟都城扶餘及び其の地方も未定稿であつて、昭和二年五月、往復一週間を以て扶餘地方の史蹟を踏査された時の報告に外ならない。凡て五項数十目に分けて其地方の歴史地理に就いて述べられたもので、前記諸論文と併せ讀むべき詳密な研究報告である。而して此旅行は次項の旅行と共に故博士が百濟史研究に非常な興味を起されるやうになつた動機をなすものであつてみれば今日、本書の成るに至つた遠因と申して差支ない興味ある旅行の報告である。

附録に載せられた「全羅北道西部地方旅行雜記」は昭和四年五月六月、五年六月八月九月十一月の六回に亘つて、「文敦の朝鮮」に發表されたもので、昭和三年八月初旬に於てなされた旅行の報告に外ならない。故博士は謙遜して、「茲に誌すのは其旅の雜記である。従つて研究に亘つて居ない。研究の結果は然るべき折に然るべく發表するつもりであるから、此記事の淺薄な事は御承知の上でお讀みを願ひ度い云々」と言つて居られるが、決して單なる旅行記でなく余十項とも得易からざる研究報告であり、又立派な論文である事は申す迄もないのである。殊に専門家は別として、此地方に關して知る所少い者に對し、實

地に就いて種々の史料文獻により記述された事は、誠に興味ある報告と言ふを憚らない。

以上極めて蕪雜にして、内容に關しては勿論、外廓の紹介すらも、充分になすを得ず、却つて故博士の學徳を傷つけ汚した事を懼れるのであるが、故博士御存命中發表された四篇と未發表未定稿の四篇とを合した一冊の此百濟史研究は、實にこの方面の研究者の指針となるものであつて、やがて後進の士の奮起を促し以て故博士の遺志の一端なりと具現するもの、出る事を切望して止まない故を以て敢て拙文を以て紹介の辭とした次第である。嗚呼、博士永眠されて茲に滿二年、今や滿鮮史研究、再認識の聲の盛んになつた時、この良著を刊るに至つた事は我學界の限りなき喜びとする所であると共に、今後引續いて故博士の遺稿の續編が出ん事を祈つて止まないものである。終りにこの良著の編纂印行に猷身的努力をされた藤田、末松、田川の三氏に謹んで感謝の意を表する次第である。(菊版、定價五圓京城近澤書店發行) (悠淵)

### ●東方文化學院京都研究所報告第五冊

自顧愷之 支那山水畫史 伊勢專一郎著

本書は東晉の顧愷之より五代の荆浩に至る凡そ五百年間の山水畫史である。尤もこの時代は材料の至つて鮮ない時代なので、第一章は顧愷之の女史箴、第二章は傳李昭道金碧山水圖卷第三章は王維江山雪霽圖卷、第四章は浩荆秋山瑞靄圖が主なる